

本を見ることの大切さ

——日本古典文学研究の基礎

安原眞琴

この小論を、文学を勉強しようと思っている大学生と大学院生に、心をこめて捧げます。

はじめに

私は、日本古典文学、特に、中世後期から近世初期の文学を研究しています。この時期に限らず、日本古典文学を研究するにあたり最も大切なことは、実際に資料を見ることです。資料を見るとは、本を見ることです。内容を読むのではなく本という物を見ることです。本とは、作られた当時の、本物の本のことです。

資料を見るのは、名探偵が現場に行き、実際に手掛かりとなる物証を探し、見つけ、触り、検討するのに似ています。たとえば、たとえ本物そっくりの物証のコピーを見ても、犯人を見つける手掛かりは得にくい、というよりほとんど得られないでしょう。

日本古典文学に置き換えると、コピーは翻刻本のことになります。本物の資料はなかなか見る機会がありませんし、変体仮名で書かれていますので、慣れないと非常に読みにくい。そこで、現代の活字になおして、句読点を入れたりします。これを翻刻といえます。翻刻本を出版することで、資料を多くの人々が読めるようになるというメリットもありますが、それはあくまでもコピーであり、本物の資料ではないのです。翻刻本を読むときは、コピーであるということを、常に念頭において読む必要があります。

名探偵は、物証を詳細に検討・分析し、そこから様々な情報を得て、犯人あるいは事件の真相に迫っていきます。これも、日本古典文学研究で、本物の本を詳細に検討・分析し、その本から様々な情報を得て、どのように、誰によって作られ、どのように読まれていたかといった、具体像に迫っていく方法論と重なります。

できるだけ実物の本に触れてください。本物の本から得られることは、何よりも大きいからです。本を見るという基礎作業なくしては、内容を正しく検討し理解するこ

とはできないのです。

1 本を見るとは何か

では、本を見るとは、具体的に何をどうすることでしょうか。物の見方は多ければ多いほどよいと思います。たとえば、画家あるいは哲学者が、りんごを見て、丸いだけではなく、赤いとか、枝がついているとか、下のほうは白っぽいとか、どこから光があたっているとか、食べると甘そうだとか、どんな人に食べられそうだななどと、五感をフル活用して、色々な角度、視点から対象を観察するように、です。

そこで以下に、「本を見る」という行為を、できるだけ分化して、具体的に提示していきたいと思います。

①**本の所蔵先を知る** 本を見るとは、所蔵先を知ることです。どこに本が所蔵されているのかを知らなければ、実際に本を見ることはできません。では、所蔵先を調べるには何を見たらよいのでしょうか。そのためには『国書総目録』と『古典籍総合目録』

を見る必要があります。共に岩波書店から刊行されています。後者には、前者に掲載されていない新たな所蔵先が書かれているので、まず前者を、次に後者を見て、自分で所蔵先一覧を作ってください。

②所蔵先に行つて本を見る 所蔵先が分かったら、次は本を実際に見に行きます。国立国会図書館や都立中央図書館などの公共図書館に所蔵されているものもあれば、早稲田大学や京都大学などの大学の図書館にあるものもあります。また、文書館や博物館などに所蔵されているものもあります。中には、個人のコレクションで、分散、散逸してしまったものもあるので、その場合は仕方がありませんが、その他の所蔵先には、どんなに遠くにあつても、直接出向いて本を見てください。

しかしながら、実際に所蔵先に行つて見るのはかなり大変ですし、所蔵機関によっては、あらかじめ閲覧願を提出し、その後何ヵ月も返事を待つ場合や、見せてもらえない場合もあります。そこで、最低限必要なこととして、本物の資料の代わりになるものを見ることを勧めます。代わりになるものとは写真版(デジタル写真なども含む)です。

便利なことに、日本古典文学の多くを写真版として所蔵している公共機関があります。それは国文学研究資料館です。ここに行つて、本物の資料の写真版を見てくださ

い。翻刻本というコピーとは違って、写真ですから、本物に近い状態で見るることができます。また、翻刻本の場合には、誤字、脱字、翻刻間違いがある場合がありますが、写真版の場合は、その心配はまったくありません。写真版は、本物の資料の次に信頼できる資料です。

③本に触る さて、写真版はあくまでも必要最低限の資料ですので、以下に、本物の資料の見方に絞って話を進めます。本を見るためには、まず本に触らなければなりません。ほとんどの人が、翻刻本というコピー、たとえば、日本古典文学大系のような翻刻本に慣れているので、本物の本を見て触ったとき、あまりの印象の違いに驚くかもしれません。この驚きこそが大切です。

次に、触る段階に入ります。触り方は、一般書や雑誌を読むのと基本的には同じですが、本物の本は一冊しかなく、何百年も経っているものですし、なにより自分の本ではなく図書館や博物館あるいは個人が所蔵している本ですから、丁寧に扱わなければなりません。まず手を洗って、両手で本を持って、それを机に置き、イスに座って、一頁ずつ丁寧に頁をめくりまわります。ごく当たり前のことですが、その当たり前の姿勢が、雑に読むことに慣れた現代人にはなかなか難しかったりします。とにかく本自体と所

蔵先のことを思つて、誠意をもつて触ってください。

④本の箱を見る 本物の本には、むき出しのものもありますが、箱や帙ちやくに入っているものもあります。そこでまず、箱や帙があるかないかを気にしてください。もしあれば、箱や帙の材料や色合いを見てください。箱は桐箱であることが多いと思います。

箱や帙には、墨による書き込みがあることや、書き入れのあるメモなどが貼りこまれていることが多々ありますので、箱や箱蓋の裏側や帙の中までよく観察してください。書き込みや書き入れは、本が作られた当時のものと、後から書いたり、メモを入れたりしたものがありますが、本を知る際の重要な情報源の一つですので、注意して探して、もしあればそれを読んでください。

⑤本の冊数を数える 本は、一冊で終わりのものもあれば、上・下からなる二巻二冊本や一〇〇巻一〇〇冊本などもあります。本来、何巻何冊本であつたかを、自分の目で見て確かめてください。もし欠けていれば、不完全な本ですから、どの巻の何冊目が失われてしまったのか、その他の所蔵先には完全な本が残っているのかどうかなどを確認してください。

*1 書物を保護するために包みくるむもの。現在では厚紙を芯にして紺無地の木綿を張つて作られることが多いが、ボール紙のみの簡易な帙もあれば、装飾を凝らした複雑な形態のものまである。

⑥本の大きさを見る 次に、本そのものを見ていきます。まずは、開かないで、外面を見てください。本の大きさや形状、表紙などの外面は、本の顔にあたる部分です。まず、どんな顔をしているのかを見るのです。本の大きさのみから、製作期や製作者像、あるいは作られた目的なども推定できます。大きさ自体が、重要な手掛かりなのです。形状は、おおよそ冊子本か絵巻かに大別できます。また、縦型本か横型本かに分けられます。大きさは大・中・小に三大別できます。これらは目で見ただけで判断できますが、印象はすぐに薄れてしまうものなので、形状をメモし、大きさはメジャーで測っておいてください。縦の長さや横の長さを、センチメートルの単位で測っておくとよいでしょう。

⑦表紙を見る 表紙も本の顔の一つです。まず、表紙が、本が作られた当時のものか、後から補われたものかを確かめます。綴じ糸や見返しなどをよく観察してください。その時に後表紙も見てください。

そして、当時からのものであれば、次に色を見ます。表紙の色によって、製作期が推定できることがあるからです。たとえば、栗皮色の表紙のものは、江戸時代のごく初期に作られた本であると推定できます。色の次には模様を見ます。模様も製作期を

知る手掛かりになる場合があります。

さらに、これは通常はしてはいけないことですが、表紙裏を覗くというのも、表紙を見る一つの見方です。江戸時代に出版された冊子本の場合、表紙に少し厚みをもたせるため、布団の中綿のように、表紙紙と見返し紙の間に、反故紙を何枚か入れ、それによって厚みをもたせる方法をとることがあります。

この反故紙は、その本を作った本屋さんが、印刷ミス——もちろん印刷機ではなく、版画のように手で刷るのですが——したものを、捨てるのはもったいないので表紙裏の弾力材として使ったと考えられます。そうであれば、もし反故紙に製作期が分かる資料が入っていれば、その本の製作期も、それとあまり隔たりのない時期に作られたと判明しますし、また、実物が失われた本で、反故紙にしか残っていないといった貴重な発見をする場合もあります。

ただし、表紙裏の反故紙は、本来見えるように作られたわけではありませんので、表紙の糊がはがれて、裏が見えてしまう場合を除いて、見ることはできません。もちろん見たいからといって表紙をはがしてはいけません。

⑧題を見る 本の顔で、もう一つ重要なパーツがあります。それは題（タイトル）です。

題も表紙と同様に、まず、本が作られた当時のものか、後のものかを確認めます。次に、題の書き方を見ます。これには、表紙に直接書く（刷る）場合と、題簽^{だいせん}という小さな紙に題を書く（刷る）かして、それを表紙に貼る場合の二通りあります。

題簽はおおよそ、細長いタイトルだけが書かれたものと、大きな紙で、タイトル以上の情報が書かれたものと大別できます。後者には絵が刷られることもあります。細長い場合は、どこに貼られているかを見ます。中央に貼られているのか、左の上の方に貼られているのか、ということです。これによって本の価値が推定できるからです。大きな題簽は、そこに書かれた多くの情報を詳しく見ていきます。

⑨本を開く では、いよいよ、本を開いてみましょう。本を開くと、冊子本の場合、見開きで右と左の頁が同時に目に飛び込んできます。まず見てほしいのは、表紙の裏面にあたる見返しです。見返しにも題が書かれる（刷られる）など、様々な情報が盛り込まれていることがあるからです。

⑩本の紙質を見る 次に、本文が書かれている紙が、どのような材質の紙かを見ます。本物の本には、翻刻本に使われているような洋紙ではなく、和紙が使われているのが

分かると思います。その和紙の中でも、どのような和紙を使っているのかを、目で見
ておおよそのことを判断します。本に使われる和紙の種類には、楮紙ちよしや鳥の子紙うすこなど
があります。江戸時代に出版された本の大半は楮紙です。それよりも表面がつるつる
して、卵のような色をしているのが鳥の子紙です。後者の方が高級な紙ですので、そ
れによって本の価値が分かります。

⑪紙に汚れなどがないか見る 紙自体の状態を知るのも重要です。クタクタに疲れた
本や、破れている本は、扱うときに注意しなければなりません、ボロボロの本を直
そうと思った人が——江戸時代の人かもしれないし、近代になってから、あるいは
現代に直されたものもあります——補修をしている場合もあります。

また、あまりにもきれいな本ですと、保管の仕方がよかったという場合もあります
が、あまり読まれていなかった、と推測できることもあります。反対に、手垢の跡が残っ
ている本などは、かなり開いて読まれた本であると推定できます。手垢は、頁をめく
るときに付くものですから、紙を見るとときには、各頁の下の隅の方も、よく注意して
見てください。

さらに、針穴が付いている本もあります。これは、本を綴じるための糸綴じの跡の

*2 楮こうぞ（桑科）の繊維で
漉いた和紙。

*3 雁皮がんぴ（沈丁花科）の繊
維で漉いた和紙。斐紙ひし、
雁皮紙ともいう。

場合もありますし（写真3-1（1）参照）、紙に野線がついているわけではないので、各行の頭の部分に細い針穴を付けておいて、どこから書けばよいかの目印にされたものもあります。紙から、様々な情報が得られるので、よく観察し、手掛かりを発見してください。

⑫最初の頁を見る　では、最初の頁を見ましょう。何が見えるでしょうか。そこに見えるのは、本文でしょうか。それとも目次あるいは序でしょうか。まず、それを認識して、本文の前に序や目次などがあれば、それぞれの巻頭と末尾を見てください。巻頭である一行目には題があり、末尾には序を書いた人や、それを書いた年月が書かれていることが多いからです。次に、本文の巻頭を見ます。そこにもほとんどの場合、題が書いてあります。これらの題をそれぞれ、「目録題」「序題」「内題」などと呼びます。

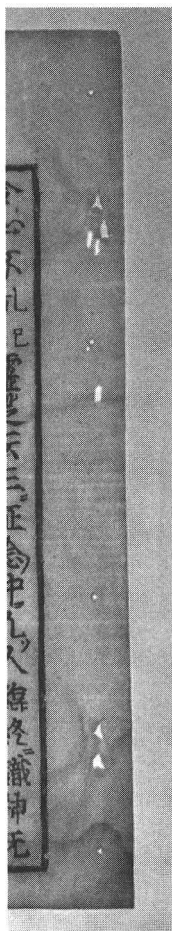


写真3-1（1）

写真3の拡大写真。料紙の右端の部分。縦に並ぶ四つの針穴が糸綴じの跡。

これらの題は、それぞれ異なっていることがあります。また、表紙の題（外題と呼びます）とも違うことがあります。このような場合、コピーである翻刻本は、複雑になるのを避けるため、基準を決めて、外題を使ったり、それが剥がれてしまっていない場合は、序題や内題を参考にして、どれか一つをタイトルとして使います。しかし、本物の本には、実は様々なタイトルが付けられていることがあるのです。

⑬最後の頁を見る 次に、いきなり最後の頁を見てみます。ここには現代の本と同様に、いつ、誰が執筆し、どの出版社から刊行されたかといったことが書かれて（刷られて）います。これを「刊記」とか「奥書」などと呼びます（写真1参照）。刊記・奥書は、その本がいつ、誰に、どのような状況で書かれたか（出版されたか）を知るための、重要な手掛かりです。

⑭匡郭を見る 江戸時代に出版された本には、多くの場合「匡郭」きょうかくが付いています。これは本文の四周を囲むしきりのことです。このしきりを見ることで、出版形式が分かることがあります。

出版形式には、おおよそ整版と活字版の二種類があります。「整版」は、江戸時代

の一般的な出版形式で、一枚の板木に逆さ文字（鏡文字）を彫って、それを刷るというものです。「活字版」は、活字をおよそ一文字ずつ逆さ文字で彫って、それを一文字ずつ置いて組んでいくという形式のもので、活字版の場合、匡郭の角にあたる部分に、少しすきまが見られるものがあります（写真2参照）。それによつて、活字版であると判断できます。

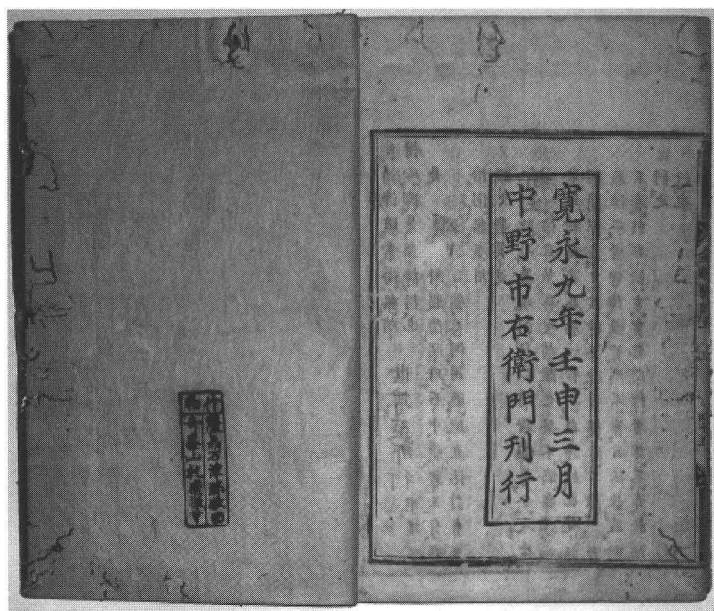


写真1 「川老金剛經序」との序題を持つ資料の、上巻の最終丁ウラにある刊記。これによって、この本が、寛永9年（1632）3月に、中野市右衛門という本屋から出版されたことが分かる。

⑮柱を見る 江戸時代に出版された本のほとんどは、各頁が和紙を二つ折りにした袋とじ状になっています。その袋とじされた一枚の紙を、頁とは言わずに「丁」と呼びます。ですから頁の数え方は、何丁目の表（オモテ）あるいは裏（ウラ）という言い方をします。

その折り目に当たる部分には、ほとんどの場合、細長い枠を作って、そこに題や巻数、頁数などが書かれ（刷られ）ています。この細長い枠を「柱」と呼びます（写真3参照）。

柱を見ることができ、何頁かが分かりますし、また、「落丁」といって、一頁分抜けているとか、「乱丁」といって、頁の順番を間違えて綴じている、などということが分かります。

さらに、「又丁」といって、同じ数字が二頁続き、その一方の数字の上に



写真2 「新編古今事文類聚」との内題を持つ古活字版の資料。巻之一百六十、十一丁オモテ。右側の上下角の匡郭が離れているのが分かる。

「又」という文字を刷ったものがあります。又丁は、挿絵の頁に多く見られます。この又丁の有無によつて、はじめは挿絵がなかったが、その後、挿絵を追加して再版した本であることなどが知られます。

⑯本のページ数を数える
頁数（丁数）を数えて、落丁や乱丁がないか否かを確かめておくことも大切です。また、本来、何頁ある本であつたかを知るのも、重要なことです。



写真3 「法事讃私記」との内題を持つ、袋とじされていた版本を、糸をほどいて料紙を1枚ごとにバラバラにしたもの。文字を囲む四角い枠が「匡郭」、中央の縦長の枠が「柱」。

現代の本とは異なり、落丁・乱丁は、江戸時代の本にはしばしば見られるので、あるものと思つて、柱の頁数（ちようげ*丁付と呼びます）と比較しながら、注意して数えてください（写真3-（2）参照）。

⑰印を見る 本には、印（ハンコ）が押されていることがあります。これは、かつての所蔵者が本屋が押したものです。いずれの場合にせよ、印を見ることで、誰が持っていた資料か、あるいは誰から誰の手に渡ったかといった、本の履歴が分かります。

以上、「本を見る」とはどういうことかということを、細かく見てきました。実は今まで「本を見る」と言ってきましたが、これを広く「書誌学」といいます。書誌学と呼ばれる「本をしつかりと見る」ということなくして、つまり、自分が調べたい本が、いつ作られ、誰が書き、どんな形をしており、どれくらい読まれていたのかを知らずして、内容を正しく検討することはできません。そして、それは本物の本を調べると

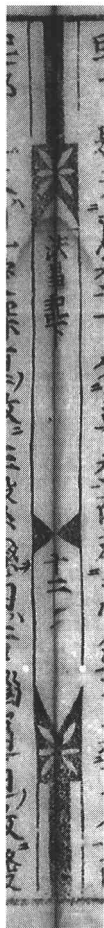


写真3-（2）

写真3の拡大写真。柱に刷られた「十二」という数字が、頁数をあらわす丁付。

*4 料紙の順序（現在でいう頁数）を示す数字。

きにはじめて分かるのです。

本は、詳しく見れば見るほど、いろいろな情報を提供してくれます。是非、本物の本を見てください。それが叶わなければ、最低限、写真版を見てください。

2 実際に本を見る

最後に、「本を見る」体験を、もう少し具体的に味わってもらいたいと思います。私の研究している本のうち、多くの時間を費やして向き合っているのは『扇の草子』という資料です。

内容を簡単に説明しておきます。『扇の草子』は、中世後期から近世初期、およそ一六世紀後半から一七世紀初頭にかけて、作られたものです。物語が書かれたものではなく、様々な和歌を収めた、和歌の集成本のようなものです。

そして、これが特徴的なことなのですが、和歌には一首ずつ挿絵が付いているのです。しかも、その挿絵が扇面形の枠の中に描かれた、いわゆる扇絵になっています。さしずめ、扇絵の挿絵付き歌集といったところでしょうか。

以下に、前章の「本を見るとは何か」に付けた小見出し①―⑱に対応させつつ、『扇の草子』を例にとつて、「本を見る」ということを、もう少し具体的に見ていきたいと思います。

①本の所蔵先を知る 『扇の草子』には、翻刻本はありません。また、研究書もないので、すべての研究を一から始めなければなりません。

「本を見る」ための第一歩として、まず所蔵先を調べましたが、『国書総目録』にわずかに数箇所掲載されているのみで、かつ、江戸時代に作られた出版本（これを版本と呼びます）しか掲載されていませんでした。ところが、論文などを調べるうちに、写本類も多数存在することが分かりました。さらに、古書店（古本屋）が出す出品目録に、いくつか掲載されているのを知りました。そこであれこれ調べたところ、現在確認できた所蔵先は、約四〇箇所になりました。

②所蔵先に行つて本を見る 自分で作つた所蔵先一覧に従つて、すべての資料を見に行きましたが、それはかなり大変でした。閲覧しやすい公共図書館はよいのですが、資料の多くが美術館や個人の所蔵だったからです。美術館や個人蔵の本は、つてがな

かったので資料を見せてもらいにくかったのです。また、日本ではなく海外の図書館や美術館に所蔵されている資料も、あまりにも遠くお金もかかり、見るまでに何年もかかりました。

③本に触る いずれの資料も、写真版もなく、どのような資料なのかまったく分からなかったで、それぞれをはじめてみたときは感激しました。資料は、絵巻、冊子本、屏風など様々な形状をしており（写真4参照）、また、金や銀を使った豪華で美しいものから、稚拙な絵が描かれたものまでありました（写真5参照）。実際に本を見たことで、『扇の草子』という作品が、幅広い階層の人々に読まれていたことが分かりました。

④本の箱を見る 箱に入った資料もありました。それらの資料にはどこにも題が記されていないなかったので、箱に書かれた題が唯一の手掛かりでした。しかしながら、その箱書きも、一つは作られた当時のものらしかったのですが、その他は後代の人が書いたものであったので、後者の資料の題は、いまだに分からずにいます。

また、箱の中に、江戸時代の鑑定家こひつけが書いた鑑定書が入っていることもあります。鑑定の専門家を「古筆家」、鑑定書を「極め札」と呼びます。極め札は、箱に入って



写真4 屏風装の『扇の草子』。



写真5 写真4の部分。屏風に貼られた12枚の断簡中のうちの1枚。稚拙だが愛らしい扇絵が描かれている。

いるものもあれば、古人が書いた手紙や短冊など（これを古筆と呼びます）を取り集めた本に収められているそれぞれの古筆や、屏風の裏面などに貼り付けられていることもあります（写真6参照）。

極め札は、筆跡鑑定書なので、資料の製作者や製作年代を知るための重要な手掛かりですが、あまり正確ではないことが多いので、ただちに信用しないように、扱い方に注意してください。なお、古筆を取り集めた本のことを「手鑑」といいます。

⑤本の冊数を数える 二

冊からなる資料はありま
せんでした。ただし、その
他の資料との比較により、
ある資料が、本来は二冊
本として出版されたと類
推できました。つまり、そ
れ以前に出版された一冊
本と同じ板木を使って刷



写真6 写真4（屏風装の『扇の草子』）の裏面に貼られている極め札。

られた資料なのに、一冊本の半分の分量しかなかったのです。

具体的にいえば、八〇首の歌と八〇個の扇絵が描かれた一冊本があるのですが、それと同じ板木を使って後から刷られた再版本（後刷り本と呼びます）には、その半分の四〇首と四〇扇しかなかったのです。

おそらく江戸時代の本屋が、二分割して二冊本として出版したうちの、一冊だけが残ったのだと思います。

⑥本の大きさを見る 『扇の草子』の資料は、絵巻と冊子本とに大別できそうながことが分かりました。前者の絵巻には、大きいものと小さいものがありました。小さい絵巻は「小絵」と呼ばれます。後者の冊子本は、二大別できます。一つは手書きの「写本」で、もう一つは出版された「版本」です。

写本の大きさはまちまちで、手のひらほどのサイズから、縦三〇センチほどの大きな縦長の本もありました。版本は写本よりも大きさの種類は少なく、縦が約二八センチの大きな本と、縦一七センチほどの中くらいの本の二種類のみでした。前者は「大本」、後者は「半紙本」などと呼ばれます。

⑦表紙を見る　ほとんどの資料は、表紙がとれて失われているか、後代に補われたものであると確認できました。

⑧題を見る　表紙がないので、外題もほとんどありません。また、内題や目録題など、その他の題を有するものもほとんどありませんでしたが、元の題簽（原題簽と呼びます）が残っているものが二、三点ありました。

ただし、原題簽には、資料ごとに異なるタイトルが付いており、題が固定していなかったと分かったので、自分なりに、すべての資料を総称する仮題を付けることにしました。それが『扇の草子』なのです。

⑨本を開く　本を開いて見返しを見ましたが、いずれの資料にも見返しには何も書かれていませんでした。

⑩本の紙質を見る　本の紙質は、おおよそ、写本には鳥の子紙、版本には楮紙が使われていました。

⑪紙に汚れなどがないか見る 紙（料紙といいますが）を見ることで、色々なことが分かりました。たとえば、絵巻や屏風といった形状をしているものでも、大半が元は冊子本であったことが、袋とじされていた折り目や、頁下の隅が手垢で汚れていることで知られました（写真7参照）。

⑫⑬最初と最後のページを見る 最初の頁からは、内題もなく、また⑪から知られるように、『扇の草子』には、原形を留めていない改裝された本が多いので、最後の頁から、重要な手掛かりとなる情報は、ほとんど得られませんでした。

⑭匡郭を見る 版本の資料には、匡郭があります。⑮で後刷り本の話をしましたが、二つの資料が、同じ板木で作られたものであると分かったのは、匡郭などの版面をよく見たからです。同じ彫り傷が、二つの資



写真7 写真5の拡大写真。手垢の跡が見られるので、元冊子本であったと推定できる。

料に共通していくつも見つかったことが、一つの大きな手掛かりになったのです。

⑤柱を見る 柱にあたる部分に丁付がある資料が二点ありました。⑤で触れた元二冊本と推測される版本と、それに基づいて作られた新版がそれです。元二冊本の前に同一板木で作られた一冊本に丁付がないことから、元二冊本は、板木に丁付のみを追加して刷られたことが分かります。追加するときには、もとの板木に新たな木を埋め込んで、追加したい文字などを彫りなおすという方法がとられました。これを「埋め木」あるいは「入木」(にゅうぼく) (入れ木ともいいます) と呼びます。

また、柱ではありませんが、写本の冊子本で、綴じられた糸がなくなるなどして、本の形状が壊れてしまったため、料紙のみが一枚ずつ保存されている資料があり、その各料紙の横端の中央に、墨で頁数が書かれている(丁付)のを見つけて、綴じられていた順番が判明した例もあります。

ついでに言えば、『扇の草子』には、本の形状が壊れて(あるいは壊して)、料紙を一枚ずつ新たに綴じなおした改装本が多いのですが、中には一枚だけしか残っていない資料もあります。それを「断簡」といいます。

⑩本の頁数を数える 『扇の草子』の場合は、冊子本と絵巻が混在している資料なので、頁数よりも歌数と扇絵数を数えることで、分量を考える目安にしました。少ないもので三〇扇三〇首、多いもので一二〇扇一二〇首の資料があり、分量もタイトル同様、固定していなかったことが分かりました。

⑪印を見る 印が押されているものは多くはありませんでしたが、押されているものを見て、それらの資料の履歴が分かりました。たとえば、国文学研究資料館に所蔵されている本には、「拝土蔵書」と「月明荘」の二つの印があります。前者はアメリカのドナルド・アンド・メリー・ハイド・コレクション、後者は近代の古書店主反町茂男の印です。おそらく、ハイド氏が古書店主反町から本を購入して、長い間アメリカにあったものが、売りに出されて現所蔵者が落札したため、再び日本の地を踏んだものと思います。

以上、私が『扇の草子』という資料を見てきた体験を述べてきました。本物の本を探したことで、一六世紀後半から一七世紀初頭にかけて、『国書総目録』に掲載されている以上の、多くの資料が作られていたことが分かりました。実は、今でも巷間か

ら次々と発見され続けているので、資料の数（伝本数や諸本などといいます）はどんどん増えているのです。

そして、所蔵先に行つて、実際に本物の本を見ることで、製作時期のほか、享受者の層の幅が広がったことや、近世初期の印刷時代の到来と同時に、ただちに出版されたことなどが分かりました。

この小論では、「本を見る」見方を中心に、その重要性和面白さを伝えることを目的としたため、具体的な事例はかえつて煩雑になるので、ほとんど省略しました。各々の資料がどんな形状をしており、どこに所蔵され、どんな経歴を持っているのかなどの詳細については、拙著『扇の草子』の研究——遊びの芸文』（ぺりかん社、二〇〇三年）を読んだければと思います。

また、実際に本を見るとなると、多くの疑問がわいてくると思いますが、分からないことがあれば、身近にいらつしやる先生方にうかがうなどして、より具体的に詳しい見方を少しずつ学んでいってください。小論の最後にも、自分で勉強するための主な参考文献をあげておきましたので、是非それらも活用してください。

おわりに

日本では近年、日本古典文学を軽視する傾向があるように感じられます。しかしながら本当に、自分が生まれ住んでいる国の、文化や文学を知らなくてよいのでしょうか。日本には多くの日本古典文学が残っています。そして、日本に住んでいる限り、海外の文学よりも、はるかに本物の資料を見やすい状況にあるといえます。この恵まれた環境を利用して、是非とも本物の本を見てください。もしそれがどうしても叶わなければ、最低限、写真版を見てください。内容の検討も、資料を見てからでなければ、机上の空論になりかねません。

今後にもたくさんのお名探偵が出て、資料という手掛かりを精査して、既知の日本古典文学の真価を発見し、まだ埋れている多くの日本古典文学を発掘してくれることを期待しています。私自身も名探偵を目指して、これからも現場を歩いて、手掛かりを探し続けます。

「付記」掲載した写真はすべて家蔵本です。

本を見るための参考文献

井上宗雄他編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年）

川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』（雄松堂出版、一九八二年）

藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書院、一九九一年）

中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店、一九九五年）

渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系、青裳堂書店、二〇〇一年）

渡辺守邦研究代表者『表紙裏反古を国文学研究資料として活用する方法の開発を旨とする研究』（科学研究費研究成果報告書、二〇〇八年三月）